＜Part 1 修正部分＞

p. 106 の最初の段落

亀岡に関わる伝承で最も人気なのは「丹の海」の開拓であろう。次の田中（1941）『丹波の傳承』（亀岡の治水: pp. 81-82）では出雲系の伝承が重視されている。

注記：　次の，「この伝承」ではじまる文は削除する。

p. 106 の「引用～亀岡の治水」と，この直後の「筆者の母校」で始まる段落の間に挿入

この引用では出雲系の鍬山神社の伝承が採用され大国主命が主人公になっている。本論では後述のように，秦氏（大山咋命）が主体で先住の出雲族が協力したと筆者は考えている。

p. 110 の「引用～上田の図表の説明」直前の行

上田は図表（本報告の図 2）の示す意義を端的にまとめており，その文すべてを次に示す。

p. 112 の「国立国会図書館デジタルコレクション」で始まる第 2 段落の末尾に追加。

井上（1995）は，これをそのまま踏襲している。

p. 113 の「II 桑田郡式内社一覧，の直前に，次の新たな節 I.3 を追加。

I.3　大山咋命と大国主命の上下関係

『亀岡神社誌』「桑田神社」（pp. 210-211）の内容は，前掲の『神祇志料』と趣が異なる。

――――　引用～『亀岡神社誌』桑田神社

大山咋命は大国主を従えてこの地に来られ，土民を督励し，相協力して岩を穿ち，石を割り，土を盛って，山本浮田の峡を切り拓き，山城葛野へ水を流し陸田に干拓し，後，大山咋命は鋤を取り，大国主命は鍬を取って，土地の住民とともに農耕に励んだ。当時，この地を田庭と呼ばれていたそうで，丹波はこの田庭より名付けられたと思われる。

引用～おわり　――――

この引用では大山咋命は大国主命より上位にある。祭神が大山咋命であり，桑田神社が松尾系に属することに対応している。『神祇志料』をまとめた栗田寛は東京帝国大学教授で近代的歴史学の確立に寄与したが，水戸学的尊王精神を持ち，皇室を中心とした国体を歴史的に証明しようという思いがあり，それが大山咋命を大国主命の上位に置く社傳に対し，「大山咋神は所謂（いわゆる），お供八神の一也」と上から目線で注記したと筆者は考えていたが，『神祇志料』だけでなく，愛宕神社縁起にも同様の記述があった。ただし，維新後に書き換えられた可能性も残る。

前掲の「引用～上田の図表の説明」にあるように，篠村，大堰川沿いの松尾系信仰圏の分布は，秦氏の祭神大山咋命が丹の海干拓の主役に当たることを強く支持するのである。

p. 118 のトップ三行の次に新たな段落を追加

改めて蓐田野神社の三祭神を眺めて，記紀に支配されていることは明らかではある。保食命（うけもちのみこと），大山祇命（おほやまつみのみこと），野椎命（のづちのみこと）のうち，最上位が皇室系であることは自明で，大山祇と野椎を祇（くにつかみ）=国津神の夫婦とすれば，この両神が地主神（ぢぬしのかみ）にあたる。皇室系支配前の地主神といえば，丹波では出雲族と考えられるので，蓐田野神社は出雲系となる，上田はそう考えたのであろう。

p. 119 の最終行の頭の部分

な創祀とされている。

p. 126 の第 2 段落（G.E.Pro，で始まる）の二行目

筆者（木庭, 2025b）の実測では，平面直角座標値（*N*, *E*）の精度は.....

p. 126 の第 3 段落（表 3，で始まる）の四行目

近の高度は人工的な改変もあり海抜 106m ほどであるが

p. 130 の V.1 のタイトル

V.1 低位段丘の離水と式内社などの進出

p. 131 の最終段落の一行目

海抜高度表示の精度は水平位置よりも多少粗いが，Google Earth Pro の機能を使って，

p. 132 の第一段落内に新たな段落を挿入

……想定したのである。

本節の観点を言い換えると，低位段丘Ⅲ面は丹の海の湖底面であって，大山咋命によって山本浮田の峡が切り拓かれて後，海抜 112～100m の小幡神社以下八社が進出したと考えたのである。

なお，この観点は後述のように遺跡分布図を調べることで再考を迫られる。

p. 133 の最初の行

市域の発掘資料の情報は市史出版後，かなり更新されていて

pp. 135-136 の V. 3 中川（2009）による案察使遺跡での「低位段丘」，のおわりの 3 段落を除いて，段丘面や段丘崖などの地形学用語に「」を追加

中川（2005, 2009）は，牛松山山麓西方の氾濫原にある K41案察使（あぜち）遺跡のトレンチ調査から「水中堆積物」中に鬱陵隠岐火山灰（10, 700 年前）を検出している。そのトレンチに近接しているとする「段丘崖の形成は 1 万年以前となり，段丘は低位段丘であることが明らかになった。」（中川，2009：p. 8）とする。

現在の河川の氾濫原のそばの崖は現在の河川の侵蝕で生成されたものなので，この観点は誤りと感じるが，氾濫原そばに見える「段丘面」と氾濫原を限

る崖が旧氾濫原が段丘化された結果とする場合は問題ない。ただ,「段丘崖の形成は 1 万年以前」という場合，その「段丘崖」は現在進行中のものであり，やっぱりおかしい。

「左岸域にはいわゆる氾濫原といわれる地域と比高差最大 5m に及ぶ段丘崖をもつ平坦面があり，現在は水田が広がっている。『新修亀岡市史』(2002) では，低位段丘面として位置づけられている。」(中川，2009: p. 7) と言う。参考文献欄を見ると，亀岡市史編さん委員会編 (2002)『新修亀岡市史本文編』第一巻，とある。これは 1995 年に出版されている。この「第一章　亀岡の自然環境」(井上, 1995) などを確認したが地形分類図などは提示されていない。中川は「氾濫原上でのトレンチではあるが近接する「段丘崖」を介した「段丘面」は低位段丘に当たるとしたいのであろうか，筆者には理解できないのである。

メモ：　中川の用語使用に混乱があり，中川の表現を「」を使って記述したのであるが，読み返してみて，著者が理解できず，新たに「」を追加することになった。

p. 136 の V.3 の最終行

掘資料情報を使ってキーサーフェスの観点から地形分類図を提示したい。

p. 146 の注 2)の修正

父木庭次守は薗田野町に隣接する本梅町で昭和 49 (1974) 年 10 月 18 日に，(日本) タニハ文化研究所を立ち上げた。その際の協力者には，日本博物館協会初代会長徳川宗敬，京都大学名誉教授上田正昭などがいる。(京都新聞丹波版昭和 49 年 10 月 19 日号「丹波の総合史 30 年計画で編集」)

(以上)